

RCの在り方について

東京世田谷西 吉橋 弘一

人類は今、居乍らにして火星の写真を見る事ができるといふ高次元の現代を考える時、RCの在り方が、あまりにも時代感覚から遊離しているという批判を受けつつあることを私は感じた。この際われわれは古きにこだわらず、自主性豊かな「会員の誰もが喜ぶような」運営ができるように、みんなで作る必要があるのではなからうか。

そこです。例会の時間の使い方であるが、型式ばった堅苦しいことは出来るだけ排除して、明るい雰囲気にするために、委員会の数を整理統合したらどうか。今やわれわれの生活社会は、凡ゆる分野に於て、極めて簡素化されているのだから、簡素化の研究こそ重要で、それが徹底すれば、明るい快適な例会が期待できること必定である。

奉仕は須らく楽しい明るい雰囲気であるが、冷たく厳しいスパルタ教育的環境であるよりも遙かに有意義であると私は信じる。次に、RCは団体でありながら、特に個人奉仕を要求している。会員が臨時に申込んだ場合、例外として受け付けるというならとにかく、それが常時当然であるという考え方は団体の存在する意味がわからない。

そのような個人奉仕がなければクラブが成り立たないのなら、ニコニコなど煩わしいことはやめて、それに見合う金額を別途会費として定期的に全会員に割振ったならば、それこそいろいろな面に簡素化の効果が表われ、誕生日も結婚祝も現在より遙かに明るく楽しい雰囲気となること必定で、一石数鳥の効果も期待できよう。然るに現在のような、個人奉仕を強調して、会員間の競争意識をおおりに、ニコニコの期間合計を通じて、クラブとクラブとの競争をさせる。一方シカゴの本部へ一千ドル寄附すれば、特別会員として待遇し、勲章みたいな物をくれるなど、何となく淋しい感じだ。

このように「金さえ出せば社会の為になるんだ」というような考え方は、あまりにも次元が低過ぎるのではないか。

ほんとうに社会に奉仕する「まごころ」があるならば、タイミングを捉えて対処する機

刊行物についても、編集内容を極く重要な要点的記録に止め、活字は大きく、字数は少い程効果的である筈だ。立派な本が時々渡されるが、あれを真剣に目を通して見る人が一体何%あるだろうか。刊行物があまりにも拘子定規だと、日本中ではどれだけ多くの会員が要らざる苦勞の上に時間を浪費し、また会費のムダ使いとなるかも考えて見たい。

殊に会報雑誌委員長ともなれば、それはもう食事もロクにできない程忙しい。なぜロータリーに這入ってこんな苦勞をしなければならぬのか、全く以て考えさせられてしまう。ここで私は全ロータリーに提案したいことは、会員だけが見て自己満足するだけのことに、立派な本など造らないで、もっと簡単なものにして、その金をむしろ社会のためになるような小冊子でも造って、これを日本中へ配ったらどうかと思うが如何でしょう。

次に問題なのはSAAである。例会場の設営、ニコニコボックス、進行係、雑役などぶっ付け本番の待たなし、この忙しい人達の緊張を和らげるために、なるべく多くの補助員を用意する意味に於て、SAAは親睦委員会と合併してはどうか。遠い見たこともない人達にさえ、奉仕の理想を実現しようとする会なのだから、目の前にいる自分達の仲間に対して思いやりがあって当然だと思ふ。

動性こそ重要ではなからうか。かつて印度では食糧不足のため大量の餓死者を出した。その時日本では米が在り余って捨て場に困っていた。こんな時に日本中のRCが政府に建言して、米の緊急輸送でもしたならば、それこそ名実共に国際的奉仕団体としてプライドが保てる。ロータリー綱領の中に「一人の餓死者も出してはならない」とも書いてある。

またRCでは国際交換学生の面倒を見る。その中にロータリアンの子弟も含まれていることは、RIが単なる社交団体ならそれでも好いが、社会奉仕を看板にしている紳士の団体である限り、誠に以て恥かしいことだ。とは言うものの社会は紙の裏表と同様、建前と本音と幾分の誤差はやむを得ない。それは車のハンドルの遊びと同じであることを、私として百も承知、だからこそ今時「奉仕こそ我が務め」などと言わないで「奉仕こそ我が権利」という考え方にすれば、堅苦しい暗い感じが消えて明るい楽しいクラブ運営の途が開けてくると思う。そうなれば何も出席を厳しく監督しなくとも、会員は万難を排して出て来る。あえて言いますが、メーカーはあく迄も義務ではなく権利であるべきだ。職務上の都合が悪ければ、職域奉仕の精神に則って堂々と例会を欠席する権利があつて当然だ。それをどこかで穴埋する義務があると

するならば「社会に対する職場はどうでもいから出席しろ」ということで、真の意味の社会奉仕を忘れていたのではあるまいか。ロータリアンは自他共に許す紳士である筈だ。紳士がズル休みなどする筈がないのだから、建前はとにかく、現実には寛容こそ大切であつて、人間を規則でしばり上げる態度は許さるべきではない。況んや立派な綱領をかかげて置きながら、幾多の矛盾を内包するRIおよびRCが、大学の学部(理科系は別)でさえ行なっていないところの、出席簿を振りかざす姿は充分反省に値すると思ふ。

義務でこぐ船頭の手は安易に運んでも、そこには楽しさはないが、権利でこぐ貨ボートに乗る人は、手に豆が出来ても楽しい。この真理をRIはじめRCの最高指導層の人達は、静かに味わって貰いたい。

終りに、RC例会の在り方に就いて希望を言わせてもらふならば、

「RCは徒らに型式を整える場ではなく、また緊張や修養を強いる場でもない。むしろ憩いの場として、安らぎの中に、社会人としての悟りを開かざるを得ないような「清潔な筋金が一本通っている」もので在りたい。」そして会員であることが則ち社会のためになつていくという信念と充実感が持てるようになりたいたいものだ。

(資料整理)